

# 勝林寺寺報

若不生者のちかいゆえ  
信楽まことにときいたり  
一念慶喜するひとは  
往生かならずさだまりぬ



「千載の閻室」ということがあります。

千載も万年もついた永遠底なしの閻にとざされてい

る室のことです。それは、ほんとのことが全く見えないまゝに、割合平氣でその閻のなかを生きてきた私の人生を言つてゐるのでしよう。

そして、そのことに気づかされて、どうにもこうにもならぬ不安にさいなまれるのは、「死」の宣告をうけてからです。いつたい、何のために生きてきたのか。何の意味があつたのか。死んだら、いつたいどうなるのか。どこへ行くのか。

そこではじめて、人生は「千載の閻室」であることを見つかります。死の宣告は、ほんとは生れたときに受けで

たのはずなのに。

その閻室に。それがたとえ千年万年ついた閻であつても、今ようやつと雲間を破つて、一条光明がさしてきたら、「信楽まことにときいたり」とは、光サツとさしこみ、闇たちまちに晴れた一瞬の、まぶしいばかりの明るさ、それを「信楽」「信心」というのです。

たとえ千年万年の閻であつても、その一念一瞬に、闇はことごとく晴れて、「閻室」は「光あふれる室」となるはずです。

「如來の本願真実ニマシマスラ、フタゴコロナク  
フカク信ジテ、ウタガワザレバ信樂ト申ス也」と  
親鸞さまは解説くださいます。

光の前に疑いも闇の不安も恐怖も一瞬にくだかれてしまします。そして、私の、先ほどまでの千年もの深い闇のために、千年万年を超えた昔からはたらきつゝける如來の誓いを知らされるのであります。

「若不生者のちかいゆえ」とはそのことです。  
「ワガ誓イヲ信ゼン者、若シ生レズバ（ワレモ）ホトケニナラストイウココロ」が、はじめて聞えてくるのです。

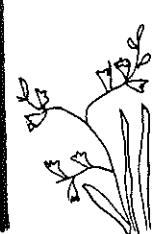
この闇のなかの私が、すでに如來から照らされ呼ばれている身であつたのだ。

すでに如來のいのちのなか、この闇のまゝが、如來に待たれていた

この光に遇（あ）えた今の一念のよろこびのたどろに、（闇や煩惱やそんなものをまだもつたままで）、「即ノトキ往生ス」—往生（如來のいのちのなかに生れ往く）かららず定りぬ。

「眞実信心ヲウレバ、スナワチ、無碍光仏ノ御コヨロノウチニ攝取シテ捨テタマワザルナリ。攝ハオサメタマウ、取ハムカヘトルト申スナリ。オサメ取りタマウ時、スナワチ（即）、トキ・日ヲモヘダテス、正定聚ノ位ニ即キ定ルラ往生ハウトハノタマウナリ」（「一念多念証文」）

五月三十日 東里森戸隆一様



## 出石組仏婦連盟総会・研修会

日時	会場	日程	講師
六月十九日(日)	九時半	出石・内町福成寺	出石組組長
午前中			研修講話
午後より			講師足利孝之師
六月二十日	九時半	同	正勝講
六月二十一日	九時半	同	堀井光明寺一周年法要
六月二十二日	九時半	同	斎木義信氏宅法事
六月二十三日	九時半	同	出石組寺族婦人会(善立寺)
六月二十四日	九時半	同	「玉日会」(本覚寺)
六月二十五日	九時半	同	「出石組組会」(止庵寺)・永井誠一氏宅法事
六月二十六日	九時半	同	斎木義信氏宅法事
六月二十七日	九時半	同	「出石組組会」(西方寺)
六月二十八日	九時半	同	ビハーラ研修会(本山)
六月二十九日	九時半	同	出石組仏婦人会総会(福成寺)・斎藤庄治氏宅法事
六月三十日	九時半	同	同・西山家恩明。青年僧侶の会研修会(神口)
六月二十一日	九時半	同	童大一講演会
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	森戸康雄氏宅法事・本覚寺永代経
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	同
六月二十二日	九時半	同	同
六月二十三日	九時半	同	同
六月二十四日	九時半	同	同
六月二十五日	九時半	同	同
六月二十六日	九時半	同	同
六月二十七日	九時半	同	同
六月二十八日	九時半	同	同
六月二十九日	九時半	同	同
六月三十日	九時半	同	同
六月二十一日	九時半	同	

## 三人の天使



アーラマ（『阿含經』）とよばれる古いお経のなかに、「天からの使い」（天使品）という一章があります。

地獄のエンマ様が、地獄に落ちてきた人びとを聞いたのです。

「お前たち、人間の世界にいる時に、三人の天使（天からの使い）に出会ったはずだ。どう

だ、出会わなかつたとは言わさないぞ。」

「いえ、そんな天使など、見たことも聞いたこともありません。」

「うそを言うな。では言つてやろう。まず第一の天使：」

「大王様、いくら言われてもそんなもの聞いたこともありません。」

「それでは聞くが、おまえ、年老いて腰がまがりツエにすがつてヨボヨボ歩む者に出会つたことはなかつたか。」

「へい、それなら見ました。それが何で天使で……？」

「黙れ、お前はその天使に会いながら、自分もやはては老いてゆかねばならぬのに、老いやく者はよその人・老いた他人をたどきたい者と避け通つてしまつたではないか。」

「次に第二の天使は病人だ・病にかゝり、ひとりで寝起もできず、やつれはててしまつた病人に出会いながら・病気になるやつはだらしない者、おれは若くて健康で……と・いつか病まねばならぬわが身に肯えて目をつぶり、通りすぎてしまつたではないか。」

「第三の天使は死だ。」

「お前自身、やがて死すべきいのちを生きていながら、死という天使に出会つても、まだ早いおれのことじやあないど、なるべく死を見まいとして、逃げまわつていたのはお前ではなかつたのか。」

エンマ様は言うのです。

「この老・病・死が、この世につかわされた

天使なのだ。

この天使によりかけられていながら自分のいのちの現実にめざめぬ人は、とこしえに悲しまねばならない。

反対に、老・病・死を抱いて今いきている私のいのちにめざめ、かつ、その老・病・死を超えて出る道を求める人こそ幸いである。それが仏陀の教えたまうた道なのだ。」

最近、私たちも、親しい人の老と病とを見ました。また人の悲しい死にも出会いました。

たゞ一人の悲しい死にも出会いました。

『ご文章』の

「サレバ人間ノハカナキコトハ、老少不定ノサカイナレバ、タレノ人モ、ハヤク後生ノ一大事ヲコロニカケテ、阿弥陀仏トフカクタノミマイラセテ、念仏申スベキナリ」の教えが、ひとしを身にしみわたることのころであります。

（「勝林寺テレホン法話」より）

一人なら  
千人万人の  
みかたが護つてくださる

法施へのお礼



「勝林寺寺報」は毎月四百部印

刷っています。都合へ出られたご

門徒やご縁のある方へ送つていま

す。月々いろいろの方からお礼の

お手紙をいただきます。五月のはじめ、次のようなお便りをいたしました。ご紹介します。

拝啓

五月の声を聞いても、いまだに朝夕は

「寺報」ならびに「テレホン法話」を拝聴し

て、ご住職様はじめ皆々様、益々御清勝の御事と拝察申し上げます。

月々のご法施ありがとうございます。思えば昭和五十九年三月、神戸別院主催広島別院参拝の折、ご住職様並に奥様との縁にあずかり、その翌月四月一日号より「勝林寺寺報」をいただき、爾來四年と二ヶ月、今月五月号をもちまして丁度五十回のご法施を頂戴致し、五十部百ページの勝林寺寺報綴りになりました。

常時手許において、縁ある毎に家内と二人で拝読致しております。

ベジの勝林寺寺報綴りになりました。

負けた恨みは未だ負けた恨みは未だ

不服の明け暮れ

出石組全体の伝道活動状況、仏事・仏事のうごき、

が一体となられての聞法・伝道にお勧みのご様子などがありありと目に浮び、ただただ感じ入るばかりです。

わかりやすいご法義をはじめ、ご門徒様たのご聴聞の姿勢、お味あいの深さ厚さ、お寺様の維持管理運営の状況、仏事・仏事のうごき、

家内もお料理の欄に目を光らせており、私も

素晴らしいしかし絵に心ひかれて楽しく書写致しております。

誠に有難うございます。

今後ともに何卒よろしくお願ひ申しあげます。

お燈明料を同封致します。

如来様にお供えいたどければ幸甚に存じます。

合掌

五月五日

これにはびつく  
鶏手羽のコカコーラ煮

にんにく味噌  
收穫したての「にんにく」・新鮮な内に「にんにく味噌」にして保存しておきましょう。一年中、新鮮なまで何にでもつかえます。

作り方

の必要量のにんにくの皮を丁寧に除きます。それをミキサーに入れ、ひたひたの量の醤油に一味唐辛子を適当に加え、ミキシングする。④味噌状になつたものを広口のビンに入れ、ふたをして冷蔵庫に保存します。

使い方

焼き肉・ギョウザなど焼き物に、野菜いためなど炒めものに、白菜のつけ物などに入れる際、唐辛子を入れると味が深くなる。

なんといつても健康のもと。

おためしください。

すんだ後でしまつた

みかけに固される

四をコロと説むかつきや

遠慮しいの人をわがせ

ひとつ仕えはあたひとつ(貧)

もうわよつとむわよつと(欲)

せみは春秋を知らず(愚)

(痴)

自て目は見えず(無智)

聞くはしから忘れる(失念)

手であることを足である(悪作)

朝に乱心夕べにカムシヤク(危)

去つた後で戻つて来い(愛着)

聞くはしから忘れる(失念)

雪と欲、横つて追なし(欲)

目て目は見えず(無智)

聞くはしから忘れる(失念)

雪と欲、横つて追なし(欲)



照満寺門徒  
山田熊造  
拝啓